

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	龍南
Author(s)	
Citation	龍南會雜誌, 140: 104-[115]
Issue date	1911-03-25
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6215
Right	

教育者と人格

文明の進歩につれて教育は非常に普及した、四十年前の教育と今日の教育とを比較すると實に霄壤の差も當ならぬものがある。昔に於ては極めて少數の人が所謂塾に通つて、非常に狭い範圍の學問をしたのに反して、今日では到る所小學校が建つ、各府縣には中學校が建つ、その上には高等教育機關が幾つもある。かくてその外觀に於ては誠に整つて來た。學科の如きも寧ろ多岐に涉り過ぎる程、色々なことを教へられる。その進歩は到底漢學一点張で通した塾教育などが足もこにも及ばない所である。しかしながら進歩と共に教育の値段は非常に下落した。一體事物は普及すると値の下るのが多い。教育の値段の下落したのが、その意味の下落なら吾人は双手をあげて祝せざるを得ない。然しながら現今

の教育の下落は此の意味にての下落よりも更に、大なる原因を有して居る。この点が吾人の甚だ遺憾に思ふ点である。この原因といふのは何か。教育者の下落、即ち教育者の人格の昔よりは遙かに落ちたことである。恰も物の普及につれて品質の悪くなったのと同様である。

之は然し教育者ばかりを責むる譯には行かない。その困つて來るところは色々あらう、試にその主たるものを數へんか、第一教育者の濫造、第二教育者と被教育者との關係が塾時代と非常に相違したること、第三二時的、腰掛教育者の増加、之は殊に小中學、第四物質的文明の影響、其他舉げ來らば幾多の原因があるであらう。然しながらかかる問題は吾人の論すべき範圍でない。

吾人は願ふ一旦啓蒙の鞭を取つて立つた以上、飽く迄教育者たるの本分を盡して貰ひたい。而して吾人が世の教育者に望む第一のことは人格の一點である。教育者にして人格卑しからんか、既に教育者たるの第一資格を缺いて居るのである。教育が單に知識の注入に留まるならば、育の字は贅物である。吾

興味がより知識を求むる、然しながら幾多青年の
胸中に湧く熱血を強ひて知識慾だけに向はしめんと
するもそれは無理である。もし人格を以て導く教育
者なからんか、青年は遂に墮落の淵に向ふの外はな
い。教育の事や第二の國民を作る重大なる事業であ
る。しかし今日の教育者に自己の天職を自覺せるも
の幾人がある。政治家には政治家の務がある、官吏
は官吏の職責がある。教育者にして何ぞ彼等を模
倣する要があるう、教育者の対象は生徒である。しか
るに生徒を導くのが本分である。而して學を以て生徒
を導くと共に徳に於て模範を示すことは最も緊要な
事である。
教育者が自分の専攻した學科の研究に身を委ぬる
は喜ばしいことである。然しながらその學が單に己
れの博識を衒はむがためであつて、ゆかしき人格の
香気なからんか、その學遂に何等の權威を値ひしな
い。權威なき千萬言は到底沈黙の間に人心を支配す
る人格の感化に如かない。而して習ひし書の内容は
感ずるに至ることも人格の香気は終生に亘る。
然しながら吾人をして更に望蜀の言を弄せしめば

なるべくは徹の生れた道徳に據らずして、飽を迄
時代の思潮を解したる人格ならむことを望むのであ
る。神經質ならむより膽汁質が多血質ならむことを
望むのである。
嗚呼教育者は滔々として自己のために計るに急
いて、人格を以て導く者に至つては寥々曉天の星
如き觀がある。この際に於て名節を重んじ、天の星
のために左右されぬ教育者の、一人にても多からむ
ことは實に吾人の希望の至りである。(珠郎)

Doll-Teacher

人形を弄つて嬉しがる子供は幸だ、人形さへあれば
駄々子も捏ねず世話もやけない。人形は青
書畫骨董に没頭し隠者めいて面白がり満足もする
人は御目出度い、靜に世波を避け已れを安固に維持
して行く。

イラが外面に眼を放つて生きてゐた時分は樂しかつ
た彼女は雲雀の囀る如く愉快に話し夫に滿腔の同情
を寄せてゐた所が一度自分の内面を顧みるや俄然
して自覺し「私は大抵の人の言ふ事や書物の中にある

る。さう満足しては居られませんか自分で何でも考へ
 覺めて明めて置かなぐちやなりませうかい」と絶叫し
 た。人々は驚いて、
 書物を嚙つて満足しきも我物顔に之を吹聴するもの
 は實に御目出度い、古人の糟粕を嘗めて遂に地下尺
 寸の地を守るに至る人は實に可憐である、
 學問は云ふまでもなく手段である目的ではない若し
 專問の研究にのみ汲みとして人生問題を考究しない
 様なものは腐儒である一個の製糞機に過ぎぬ小兒が
 人形遊びをやるのと何の變る所があらう否却て人を
 過り世を害する

世の中には随分立派な學者もあらう教育家も居る政
 治家も居るが彼等から名譽、功名心、黄金を取り去
 つたら跡には何が残るだらうか眞の偉大はあらゆる
 外面的の虚飾を取り去つた内面的の實質にある、
 いくぢ獨逸語を鼻にかけても義務とか權利とかやか
 まむ云々のでも自己を了解し自己の價值を自覺して
 おないものは駄目だ

教育と云ふものは個人の才能を發揮せしむるが其の
 目的であると思ふ教育者が自分の典型に生徒を求め

んとするは實に人を害する甚きものである現代の
 教育は何處までも個性を重んぜねばならぬ個人の權
 威を認めねばならぬ教育者と生徒と互に相理解相
 ばならぬ青年を指導せんとすれば其思想を知り其性
 格を知るが肝要である現代の所謂道學先生、宗教家
 が徒らに聲を大にして青年は眞面目なれば淫蕩なる勿
 れと云つても馬耳東風だ彼等は青年の思想を理解し
 て居ない何故彼等は其頑固な頭を開いて新しい青年
 の思想に接觸せぬか、
 砂糖の味は嘗めて始めて分る胃を害すると一つに思
 ひこんで徹頭徹尾退けるのは愚だ

現代青年の思想は危險だ生意氣だと頭が切れて
 青年に關した新しい著述も讀まず青年の意見もさか
 す自分等の學生時代の寸法を以て現代の青年を律せ
 んとするのは愚の極みである、
 松蔭が「かたすればかくなる事とは知りながら已む
 に已まれぬ大和魂」と歌つたのは實に面白いこの已
 むに已まれぬ氣象が教育者には必要である缺く可ら
 にざる要素である地位に戀々とし世間の風評を氣に
 し毀譽褒貶に囚はれて思ひきつたこともやれず消極

主義を標榜して喪家の犬の如く氣息奄々なもので
聞かぬも激刺たる元氣を有する青年を指導すること
が出来よう

或は學校長曰く「自分の學校にはなるだけ若い人を
入れる方針を取つてゐる小學の二年頃から來た生徒
の過半数し位い出來が悪かつても及第させるが卒業
して來る人なれば前者よりも成績が善かつても不合
格にする」と云ふ理由は高等學校に入つてからどうも
若や者の方が成績がよいからだとおして其先生は
自分の學校の生徒の出來は己の好む事を得意がつて
居るさうな

噫これ果して事實か事實とすればこんな人は教育界
の賊である其人は自己の虛榮心のために教育してを
るの坪が自分の地位に對して教育してをるのだから分
明である

自分は決して教育家の缺點を上げる者ではない又完
全無欠であれど要求する者でもない只一片筆々たる
赤心を以て生徒を主命にして職務に忠實なる様に望
むのである

（空）

偶感獨語

○グーテのフワスト中に一老人の述懐として「吾れ
今や名利榮譽もいらす大廈高樓肥馬輕裘何等望む
所なし唯一つの希望あり、唯だ我に青春を與へよ」
とある由友人より聽きたる事あり、未だ老人の身
ならねば其果して然るやを知らずと雖も熟と思ふ
此は實に老人の衷心の述懐なるべし假令老人たらず
とも青春圈内より一歩でも出でし人は正にこの感あ
るべしと思はる。

○世に帳簿相手に、算盤相手に、機械相手に其一日
を送るもの多けれど青年相争に其一生を送るもの天
下決して多からず、青年多からざるに非ずも青年自
接する機會の多からざる也、足る處青春圈内に出で
し人にして常に青年と交り青年と語らば青年を友とし
得る者あらば彼は實に幸なる人の如しなり。
○此点に於て教育者は天下清福の人也、苟も其側心
すべあらば相語るも相笑ふも相友とするも勝手也と
す。老の將に垂らんとするを知れずは深甚に也

て而も健全なる誇は天下人多しと雖も教育者のみよ
き之を誇るを得ん。清福實に健康に價す。

◎青年が疑ふ所は教育者諸氏が懸念してこの羨む
べき地位を利用しつゝあるやに存す。彼等は果して
青年に多大の興味を有せりや、クラス以外に青年と
握手しつゝありや、多少疑なきを得ず。

◎青年を友とするもの能く青年を解し得べし。吾人
は青年が日常其の自己發表をなしつゝあるに際し青
年以外の人が動蕪すれば之を顧みざるやの風あるを
怪む。例せば演說會（近く縣會議事堂に催されし

如き其半也）等に教育者側より出席少なきが如し。

青年は教育者諸氏の出欠は何等の痛痒もなければ教
育者側より見ればかかる好個の機會をも捕捉すること

なきは如何なる次第にや。

◎教師もし下ル以外に生徒を全く没交渉なり

とせばクラス擔任にして欠席日數や無届欠席の報告

を教務課より取次ぐのみならずせば吾人何となく淋

しがまざるを得ず、吾等すでに其の淋しさに慣れて

別に不都合も感ぜざれど、恐らくはさるな風では教

育者諸氏にては天與の清福を忘却したりと申すべき

か。悉くも青年に就て多少の興味を有るは慈喜を
切望す。

◎若し夫れ生徒の質問を以て自己の鼎の輕重を問ふ
ものと穿き違ふるが如き者あらば沙汰の限りなり。

生徒は從順なり。或る生徒の如きは教師の云ふがま
まにどうでもなる位に従順也。豈謀叛心ありや。

たゞ自己の主張に極端に走りかちなるは青年の特色

なり。此邊の消息は青年は興味を有せる太の萬々不
承の事なるべし。

◎余が財囊にして豊裕ならしめば余は人の上に立ち

人を相手として事を爲さむとする凡ての太に韓非子

の「書を配頒せん事を希ふ。世態人情に何等の經驗
なき余等にたりても甚だ面白ければまして社會の空

氣を呼吸したる人には更に興深かる可き事なり。」

◎新思潮と稱し新主義と號し甲論乙駁壇上に喋々の
空論を戦はすを聞くに倦みたる者は去つて人類開始

以來何等の變化もなくて今日に至れる人間の裸体的

眞理に眼を轉せずや。空理は壇上の人をして語らし

めよ、吾人は先づ空腹を満さざるべからず。花より

圓子、一語道破して余蘊なし。

○教師が其の似而非博學を街はん爲に無用の言を喋るを見るは驚たり。されど吾人は之に驚かず。宗教家がバンの爲に神佛を擔ぐを見たり、されど吾人は之に驚かず。利の爲に同タラスの人を欺くを見たり吾人之人に驚かず。是等に驚きしは既に過去に屬す。今固めて驚かざるは驚くの官能を失ひし爲めに非ず。是れ人情の或一部の吐露なるを知れば也。現實暴露は悲哀を感ずるは現代人と稱する一種デリケートなる神經系統を有する一人種のみ。

○現實暴露に何等悲哀あるべき筈なし。何すれぞ男強の誇を持して傲然として進まざる。現實に非とする所あらば已れ亦其非を遂げむのみ。人欺かば已れも亦何ぞ人を欺かざる、人打たば已れ亦彼を打ちて其の上何ぞ彼が脇腹に一蹴を試みざる、若し現實を觀て現實に超然たらば、人の已れを欺くに任せて可なり、又右頬を打たれて更に左頬を出すも亦可也、要するに世態人情に應すべき術無きこと更になし。何すれぞ六尺の男、徒に空論を喋りて婦女の泣を學ぶや。

○吾人は正義や献身や慈悲等の存在を認むる能はざる程の盲目漢にあらずされどまた老猾や利己や術論等を云々せんとする程の偏狹漢にも非ず、唯世の中は空論の通りになり倫理學の通りになると思ふ者の妄を疑ふのみ、

○請ふ貧民窟の只中に不斷の説教ありて人間の裸體的眞理を講じつゝあるは聽は。

○物理學の原則通りに働く機械は使用するに骨を折れざれど。不自由な事には人間といふ者中々に其原則に従はず跋扈跳梁、之を使ふには一通りならぬ骨折あり。人を使ふ蓋し至難中の至難哉。

○机の上に書物を澤山ならべ立てて實際が運用すると思ふ者は眞逆ありはせざるべけれど世に此に類するもの尠からず。學問が人間を使ふやも人間が學問を使ふやも一切見當つかぬ事あり

○理を究むるの傍も請ふ人情の微を察せよ、人情の作用は必ずしも合理的ならずして不規則なる放射的也、逆も書物箱の中に之を認むべからず

○之を察せん欲せば先づ空論を避けよ、何々主義

學が何々の思潮とかに一杯食はさるゝべからず。彼等が新しと感じたもの何ぞ知らん五千年來の人情のみ、人情古往今來只一徹也。

○人間には押しても押されぬ人間の誇あり、幼年時代にあるべく青年時代にもあるべく大學時代にもあるべく社會に出た後にもあるべし。たゞ外物に應じこの誇を變動し得る者は可憐哉。或はノートの爲に、或はこけ嚇しの爲に。

○空腹に死したる人なしたゞ過食に死したる人多し。人は往々食物の爲に命を失ふ。知らずノートの爲に人間の誇を失ひしものなき乎。

○借問す人間の爲の學問か、抑々また學問の爲の人間乎。

○一會を催す毎に之を生徒課に届けざるべからず。届くるに何の骨折もなければ吾人は何となく頭が重い様な感なしとせず。郷友一夕相聚りて故郷を語る時も之に先だつものは届出也。何故を知らねど不愉快の極みなり。

○吾人は生徒課が此舉をなすは只生徒が如何なる生活を知何なる所に於て如何なる方法に依て催しつゝある乎を調査せむ爲の材料にこの届出を請求するものなるべしと信ず。故に決して永久的なるものに非ざるべしと推定す。されど不快は不快也。

○干渉なるが故に不快か。否生徒課が此事をなす決して干渉に非ず。壓制なるが故に不快乎。否生徒課に壓制などあらう筈なし。然らば何が故に不快乎。云ふ能はざる所に不快あり。

○たゞ一言、生徒は其大部分に於て如何に自己を處すべき乎を知れり。

○雷鳴電閃の夜。

健全なる娛樂

血氣盛りの青年に、娛樂なくして生活せしむる專問とすべき學科に全力を挙げよ、他は顧るに及ばずといふのは無理である。老人すら何等か娛樂なくしては生活し得ないのに如何にして下宿のまつ飯や寄宿舎の汚い寢室に甘んじて、望郷の念も起さず、勉強が出来や、自宅から通學してゐる人に幸福が然

らざる人は誰か、黄昏の窓に冷き浮世の味を慨せざるものがあらう。茲に於てか娛樂に走らざるを得ない。然しながら娛樂にも澤山の種類がある。過ては實に貴重なる一生を、あたらし臺なしにして娛樂の奴隸になり終つて、醉世夢死といふみじめな有様になる。然らざるも甚しき惡影響を受けて、一生の目的にも害を及ぼすことになる。娛樂は決して人生の目的ではない、人生の目的は必ず他にある。しかしながら娛樂なくしては人生の目的は圓滿に發展させにくく、之を譬ふれば目的は機械である。娛樂はその運用を圓滑ならしむる油である。されば油の善惡を選ぶことは機械の運用上大に大切である如く、娛樂の如何は直に一生の目的に影響する。機械が錆を生ぜざるために油は是非とも上等を選ばねばならぬ。目的に益あらしむるには是非とも健全なる娛樂を選ばねばならぬ。品質の良いものは廣告せずとも賣れる。品の悪いものに至つては、實價以外に誇張を要する。また品の良いものは高いので人は一寸安價の物を買ひたがる。娛樂に於てもこの弊害はあつて、目的を傷げるもの程、甘き誘惑の花に富んで居るか、また

は安くて間に合ふ。然し青年は既に善惡を判斷する能を有力する以上、少しも注意を怠らざるを用ゐれば娛樂の是非善惡を鑑識して、善きには就ては難くない事である。

吾人が青年に最も適當と思ふ娛樂を別て、二通りある。靜動二面である。

武術遊技は動的娛樂であり讀書音樂の如きは靜的である。是等のものが健全なる娛樂なるは誰しも異議はなからう。然しこれだけではまだ娛樂は満足されぬ。茲に靜動の中間にあるもので、青年に缺くべからざるものがある。それは言はずと知れぬ食欲である。食道樂である。これも勿論健全なる娛樂中に數ふるに躊躇しな。冷き下宿生活の身にこれ程有難い娛樂はない。此程無邪氣な娛樂はない。然るに教育者中には之をしも取締らんと欲するものあるを聞くに至つては、吾人はあまりに彼等の青年と遠ざかり居るを慨せざるを得ない。

然しながら更に青年の側に就て之を見れば、また多少寒心すべき状態がないでもない。彼等は高等の

教育を受けるが、その誘惑に對するや無教育なる
 勞働者は同じく、竟已なく節制なく反省なく、徒に
 下等なる娛樂の奴隸と化し去らんとして居る。吾人
 は是等の青年あるを聞く毎に、憫笑を禁じ得ざる
 其は、精神的趣味の娛樂に乏しき現代の社會を呪は
 ざるを得ない。
 文學に對する趣味、美術に對する趣味の缺乏は、
 確に現代社會の一缺陷である。茲にいふ文學は廣義
 のもので純文學に限らない。この缺陷のために人間
 は益々餘裕を失ひて無味乾燥の化石たんとし、然
 るに當るものは下等の趣味を追て墮落せんとして居
 る。當然見識の低かるべき一般社會は暫く措き、高
 等教育の學府にある教師と生徒とに之を見んが。藝
 術の眞價を解し時代の傑作を味ふ教師幾人かある、
 不肖の太作を玩味し、趣味の向上を計る學生幾人か
 ある。彼等の血眼になりて求むるものは曰く出來る
 だけ上等のペン、奴隷となりて努力する者を以て、ま
 而して喜ぶべき者どせざるべからざる現代の學生界
 は實に憐むべきに至りならずや。その因つて來る所は

健全なる娛樂、殊に文學、美術に對する趣味の缺乏
 にあるを思へば、吾人は大聲叱呼、此の方面に於け
 る覺醒を教育者と青年とに望まざるを得ない。

寄宿舎の寢室

入學當時の記憶を呼び起して見ると、習學寮に初
 めて入つた時の事がまづ浮ぶ。建物の立派さに内部
 も噓かし立派だらうと思つて入つて見て二度びつく
 り。廊下の暗いのにまづ面喰ふ、食堂のかげ茶碗に
 また驚く、といつた按配に吃驚も澤山あると共に、
 浴場理髮場娛樂室など設備が整つてゐるのに有難い所
 だなど思ふ心も湧く。然し最も悲觀したのは誰し寢
 寢室の窮屈であらう。九枚の疊に八人の鮮詰、たま
 けに蚊帳を二つ張るのには眼を圓くして驚かざるを
 得なかつた、寢相の悪い人の足が隣人の腹に飛ぶ、
 端に寢る人は蚊帳は半分しか被らない朝起きて見る
 と變に生温い臭がする、誠に苦しい寢室である。二
 學期三學期に頻々たる脱寮者（語奇なるも實相と思
 ふ）を出すのも大原因は茲にあると思ふ。

狭いなら増築してこの不快なる寢室を改めよ。然らずんば少くとも全部を疊にせよ。安眠を要する學生の身に取りて寢室の不快は實に堪へがたいものである。徒に萬年床を非難するを止めて今少し衛生に適したる設備に改められぬもので有らうか。(珠郎)

片

○舊きものは遂に去らざるべからず、我等の任を去るべき時は今や來た。黄昏の窓に過ぎし一年間を思ふと又多少の感慨に打たれる。

○ポトレースの記録を仰せつかつて、一日を春雨に濡れつくした上に置いてきぼりを喰はされて、三部の應援船でやつと濱屋まで引き返しそぼ降る夜の街上を白毛布に頭から包まつて歸つた時の御苦勞さは、確に帳消しにはされぬ思ひ出である。

○發火演習には陣中日報記者となつた迄はよかつたが、あまりに同人が素破抜きやら惡口やら變な逸話やら書き立てたので、思はぬ所に疳癩玉を買ひ、何の氣もなく河崎君が「從軍四日」の後に日報から抜たので某教授から飛んだ所で冤罪を蒙り、年改つてか

ら迄「あの俗の字がいけない」とて大に難詰せられた實際一時の興で走り書きした陣中日報の記事に咎め立てされて記者いさゝか閉口せざるを得ない。是等は皆いたづら氣の多い若武者の筆のはね損じと免して貰ひたいものである。

○記念號の發刊が我等の時に廻り合はせたのは幸であつた。實は之に歴代の校長の肖像を入れやうと思つたけれど、ゲルトが許さなかつたのは遺憾である。之に出た龍南思想史は、卒業生の中から大分歎かれたそうである。從軍四日も或る教授から天下の明文と賞せられた。

○一番閉口したのは大逆事件から、つまり檢閲が嚴重になつたことだ。原稿を編輯兼發行人と部長とに一々見せる面会は實に少々でない。しかし一々目を注いで下さるの發行人の勞は實に氣の毒である。

○私は思ふ、誌上に出る文中には随分諸方の攻撃がある。そのために大分當部は割の合はぬ役を務めるしかしながら惡まれ口がなくては兎角世の中は腐敗する。蛆を生せんとする水にポトリと苦い藥を落すのが我々の仕事である。實際に於て効果を奏したか

否かは知らぬ。たゞ思ふ所は違にある。
 ③不景氣な娯樂室を校内に置いてたくのは校運隆盛の妨げではないか。現今の様に菓子もまづいと誰しも外で食ふことになる。しかし娯樂室の方から言へば懸けになるのが多くて、收支償はぬ恐から自然と生徒の氣に入る様に出來ないのかも知れない。兎に角校内の一隅にある以上生徒課あたりから少し注目して戴きたい。今のまゝなら潔く廢止したらよからう。

○武夫原の松原にぶら下げた体操の行進目標 何といふ殺風景なものであらう。あたふ武夫原の風趣を殺ぐ。何故あんな變なものを下げたのであらう。あんなごちや／＼した不快なものを下げる健なら寧ろ以前に時々懸つて居た白札に番號入れたのが遙に好い。あの變な札の排列はいやにげば／＼した朝鮮の團扇を思はせるではないか。呵々。(タマ)

予のたまはく、其の以る所を視、其の由る所を觀、其の安んずる所を察すれば、人焉んぞかくさむや、人焉んぞかくさむ哉

摺筆の辭

筆不性なる五人が誤り選せられて任につきしより茲に一週年思ひ出多き五冊の雜誌を残して愈々筆を摺くべき時は到りぬ。任に就きし始の抱負は徒に大にして、然かも手之に伴はず、遂に何等のなすなくして振はざるまゝに新しき人々の手に渡すことゝはなりぬ。然しながらそは吾人の才の足らざるが故にして。責を怠りしにあらざるを思ひては些か自ら諒とする所あり。

龍南の地松籟颯々として俗塵を拂ふ。誠に冥想の適地にあらずや。この域や新思潮の流れ都門の如く速かなるを得とするも猶浮華なる銜氣を去つて眞摯の泉を汲むに宜し。若き鵬翼は茲に伸びざるべからず、笈を負ふ諸子、幸に斥鴳の愚を學ぶ勿れ。

明治四十四年三月

雜誌部委員

富	田	仙	三
河	崎	清	風
吉	鹿	善	郎
赤	瀬	八	代
南	正	樹	